

豊栄神社

石見銀山は **1527** 年の発見から、徳川氏が日本全土を征服し、江戸（現在の東京）に幕府を設立して銀山を直轄領とした **17** 世紀初めまで、地方の武士によって支配されていました。徳川氏が引き継ぐ前の石見銀山は毛利氏の所領でした。毛利氏の当主であった毛利元就（**1497**～**1571** 年）は、**1561** 年に銀山を手中に収めたことを示すために、銀山川近くの傾斜地に質素な寺院を建てました。勝利を収めたこの武将は、寺院の本堂内に自分自身の木製の像も設置しました。

元就の聖域は、戦争が再び石見銀山を襲うまで、徳川支配の何世紀もの間ほとんど目立たない存在でした。**1866** 年に、日本南部の薩摩藩と毛利氏の末裔が追放されていた長州藩の進軍する部隊が、たまたまこの寺院にやってきました。最終的に日本における封建統治に終焉をもたらすことになる紛争で幕府と戦っていた長州藩士は、寺院の中に伝説の君主の像を発見して、驚くとともに歓喜しました。

戦争に勝利した長州藩士は、同じ場所に新しい聖域を建設しました。今度は、近代的国家主義の伝達手段として神道を育むという新政府の政策に従って、神社が建てられました。この豊栄神社は、**1943** 年の地滑りに一部が巻き込まれましたが、華麗な門と独特な本殿は今でも残っています。当初の利元就像は残念ながらもう存在しません。